



令和5年度
看護力向上支援事業報告会
認知症看護認定看護師の支援を受けて

公立小野町地方総合病院 岩浅みゆき

施設概要

- 病床数119床 一般30床 地域包括30床 療養病床59床
- 看護職員数88名（看護師57名 准看護師12名 看護助手19名）
- 入院平均年齢81, 2歳
- 令和元年～認知症ケア加算2算定
- 令和4年～認知症ケア加算3算定
- 認知症高齢者の看護研修受講者11名



問題点

- 入院中に認知症の悪化やBPSD出現で入院が長期化しADLが低下してしまう
- 認知症の患者は「問題行動をおこす」という捉え方から抑制や行動の制限をしてしまう
- 標準看護計画を使用しケアを行っているが、患者の状況を踏まえた個別性のある看護計画が立案されていない

目標

- 認知症ケアの基本・対応方法がわかる
- 身体拘束と倫理についてスタッフの理解を深める
- 個別性のある看護計画の立案と実践、評価、修正ができる

支援風景



実際にベッドサイドに訪問し声かけや病室の環境調整について学んだ



多職種とカンファレンスを行い情報の共有を図った

支援を受けた結果

支援前

- A様 97歳 男性 食欲不振

転倒歴があり、入院時より抑制をしていた。抑制を外し浴室で寝ていた。抑制を外してほしいという思いから興奮することもあった。身体拘束が患者の安全であるという捉え方から抑制解除できずにいた。

支援後

- ベッドを低床としセンサーマットと緩衝マットを設置した。
- 右目が義眼であり左側にゆとりを持たせる環境調整をした。
- リハビリの状況や身体的アセスメントの結果抑制解除となった。

支援後のケアの変化

- ベッドより起き上がってしまう患者のケアの第一選択が抑制であったがセンサーマットや緩衝マットを使用するようになった。
- 夕方になるなると帰宅願望が出て落ち着きがなくなる患者に対してスタッフが一緒に歩くなど寄り添ったケアやリハビリの時間を変更して他職種の協力を得ることができるようになった。
- 認知症の基本的な知識と技術を習得したことで認知症患者の捉え方が変わり患者の個別性にあったケアの介入ができるようになってきている。



今後の課題

身体拘束解除に向けた取り組み

- カンファレンスや身体拘束予防のためのケアの実践

個別性のある看護計画の立案・評価・修正

- 患者情報とカンファレンス内容を反映させ患者にあったケアの統一

認知症カンファレンス・勉強会

- 認知症ケアでの患者の反応や成功体験を共有しスタッフのやりがいにつなげる

